

## 本学女子ラクロス部におけるチームマネジメントの分析 ～関西完全制覇の要因について～

横山 誠<sup>\*1</sup> 蜂須賀 美羽<sup>\*2</sup> 相奈良 律<sup>\*3</sup> 森本 崇資<sup>\*4</sup>

### Analysis of Team Management in OIU Women's Lacrosse Team

Makoto Yokoyama<sup>\*1</sup> Miwa Hachisuka<sup>\*2</sup> Ritsu Ainara<sup>\*3</sup> Takashi Morimoto<sup>\*4</sup>

#### Abstract

The aim of this study was to analyze the positive results achieved by changes instigated in the team management of the OIU women's lacrosse team. It was discovered that the attitudes of the team members improved following participation in a team-building camp. For the purpose of the study, the squad members were divided into two groups and their attitudes ascertained. There was no statistically significant difference found between the groups, which may affirm the reason for the team's success in the Kansai Student Lacrosse League. In terms of team management, it is believed that encouraging the members to focus on building awareness of their own skills and roles within the squad enables them to contribute better to the team performance.

#### キーワード

チームマネジメント、勝利の要因、女子ラクロス部

#### 1. 緒言

スポーツにおいて、「心・技・体」の「三位一体」が重要であることは周知の通りである。この「三位一体」は、スポーツ場面において良い結果をもたらす要素として捉えられているが、個人の精神論としての一面も持っている。スポーツは、個人競技と団体競技に大別することができ、ゴルフやマラソンのように完全に個人で戦うもの、柔道や剣道のように

---

\*1 よこやま まこと：大阪国際大学人間科学部講師（2009.6.15受理）

\*2 はちすか みわ：大阪府立守口支援学校

\*3 あいなら りつ：大阪国際大学非常勤講師

\*4 もりもと たかし：大阪府立総合青少年野外活動センター

個人戦を重ねて団体として戦うものもある。また、団体競技の中にも、サッカーやバレーボールなどチームメイトのプレーの連携により、チームとして戦う特性をもつスポーツ種目（以下、チームスポーツとする）も存在する。前述の通り、個人の能力を向上させる要素として「三位一体」は重要であるが、チームスポーツにおいては「三位一体」だけでは決して強くはならない。チームスポーツで勝利するためには、個人はもちろんのこと、チームとしての強さが求められるのである。福富<sup>1)</sup>は、このチームスポーツにおいて、「対戦相手に勝つためには、技術・戦術・体力・チームワークこの4つの要素が求められる」と述べている。また、集団であってもお互いの長所を共存し合えるような関係づくりが理想のチームであり、「チームワーク」の重要性を主張している。吉井<sup>2)</sup>も、「いかに優れた個人を集めても、ただそれだけでは必ずしも強いチームになるとは限らない反面、その組み合わせの妙を得れば個人の力の総和以上の力を発揮することもある」と述べている。

このように、チームスポーツにおけるチーム作りは、集団の力を最大限に発揮できるかということを考えなければならない。また、集団や個人の特性の組み合わせといった要因が勝敗に影響することを理解しチーム作りを行わなければならない。

チーム作りの効果的な手法のひとつとして「チームビルディング」がある。チームビルディング<sup>3)</sup>とは、「行動科学の知識や技法を用いてチームの組織力を高め、外部環境への適応力を増すことをねらいとした、一連の介入方略を指す」と説明されている。このチームビルディングには、間接的アプローチと直接的アプローチがあり、野外活動プログラムの中に問題解決の場面を設定するなどした直接的アプローチによるチームビルディングが近年様々な分野で実施されている。野外活動とスポーツとの接点は理解し難い部分もあるかもしれないが、Jリーグ（サッカー）やVリーグ（バレーボール）などのプロスポーツ界、学校教育機関、民間企業など様々な分野においても実施され注目を集めている。また、我が国におけるチームビルディングの多くは、チームスポーツにおけるメンタルマネジメントとして実施され、リーダーシップ・スキルおよびコミュニケーション・スキルの向上に焦点が当てられてきた。スポーツ心理学領域においては、チームスポーツのメンタルマネジメントに関する研究班（日本オリンピック委員会スポーツ医・科学研究）がチーム心理診断テスト SPTT（以下、SPTT とする）を開発し、基礎研究や実践研究などが推し進められた。SPTT は、チームスポーツにおいて、メンバーが自己の所属するチームをどのように認知しているかを明らかにするために、客観的な心理的尺度を作成し、標準化されたものである。この SPTT を用いた研究では、チームワークと戦績に関する研究<sup>4) 5) 6)</sup> <sup>7)</sup> などが、数多くなされてきた。その中でも木村<sup>5)</sup> は「チームの組織がうまく統合され、共通の目標に向かって活動するとき、未組織的な個人の集団ではみられない成果が生み出され、団体競技においてよい結果を出すためには、個人能力の高さと、その力を統一させるチーム力が必要である」と述べている。木村が指摘するように、チームスポーツにおいて、個人のメンタルマネジメントも重要であるが、それらを把握した上でいかにチームをまとめ、作り上げていくかがチーム力向上には重要である。そして、そのためには、チームをどのようにマネジメントしていくのかというチームマネジメント能力が求められる。

そこで、本研究では大阪国際大学女子ラクロス部（以下、ラクロス部）のチーム力の変

容を明らかにし、目標までのプロセスとチームマネジメントに関する分析・評価を行うことを目的とする。

## 2. 方法

### 2-1 対象とチーム特性、研究の動機

本研究では、ラクロス部38名を調査対象とした。ラクロス部は、U-22、U-21、U-19の日本代表選手、関西選抜選手などに選ばれ活躍した経験を持つ選手が他大学よりも多く存在する。しかし、高校時代のラクロス経験者はなく、全員が大学からラクロスを始めた選手で構成されているチームである。ラクロス部の大きな特徴として、「チーム運営」と「指導者」があげられる。指導者としては、外部コーチがいるものの、新入部員の基礎的な練習から試合の戦術、スカウティングまで、すべて学生で行っている。チーム運営もキャプテンが中心となり、上級生で役割分担をするなどして学生が主体となり運営しているクラブである。

ラクロス部は、日本代表や地域選抜選手が多いにも関わらず、関西制覇という結果を未だ残す事ができていなかった。優秀な選手が多くいるにも関わらず、なぜ関西で優勝できないのか。代表や選抜で得た経験がチームでなぜうまく活かせないかを分析した結果、個人の能力だけでなくチームとしての力「チーム力」を高める必要があるという結論に至った。そして、この研究に着手することになった。

### 2-2 調査の概要

調査は、チームビルディングを目的としたデイキャンプ（平成20年8月5日に大阪府総合青少年野外活動センターにて実施）の開始前と終了後、第19回関西学生ラクロスリーグ（平成20年8月16日～11月2日）、FINAL（平成20年11月24日）の計10回の測定を行った。FINALについては、リーグ戦の戦績結果上位3チームを対象に行われる試合であり、リーグ戦績2位チームと3位チームが対戦し、その勝者であるチームとリーグ戦績1位のチームが関西一位を決める試合である。

### 2-3 分析方法

チーム力の測定にはSPTTを用いた。SPTTは全50問で構成されており、各質問項目について7件法で回答させるものである。チーム力得点の数量化については、「非常にあてはまらない」に1点、「あまりあてはまらない」に2点、「ややあてはまらない」に3点、「どちらでもない」4点、「ややあてはまる」に5点、「かなりあてはまる」に6点、「非常にあてはまる」に7点を与え、総計をチーム力得点とした。分析については、各調査時期を要因とした分散分析を行い、有意差が認められた場合は多重比較を行った。次に、今期リーグ戦において主にベンチ入りした20名をA群、主にベンチ入りしていない18名をB群と分類し、両群とチーム力得点の関係を2元配置の分散分析を用い分析を行った。チームマネジメントについての評価・分析については、チーム全体のチーム力得点、A群B群のチーム力得点の分析をみながらキャプテンが自らのチームマネジメントをふりかえったものを

考察に加える。なお、結果および考察では、同志社大学を「同志社」・立命館大学を「立命」・大阪大谷大学を「大阪大谷」・関西学院大学を「関学」・武庫川女子大学を「武庫女」・神戸学院大学を「神戸学院」・神戸女学院大学を以下「女学院」と称する。

### 3. 結果

#### 3-1 調査期間の戦績

第19回関西学生ラクロスリーグの結果は、リーグ戦が6勝1敗で1位通過し、FINALでも勝利をおさめ、1991年創部以来初の関西覇者となった。(表1)

表1 調査期間の戦績

初戦	VS 同志社	○ (勝)	第5戦	VS 武庫女	● (負)
第2戦	VS 立命	○ (勝)	第6戦	VS 神戸学院	○ (勝)
第3戦	VS 大阪大谷	○ (勝)	第7戦	VS 女学院	○ (勝)
第4戦	VS 関学	○ (勝)	FINAL	VS 関学	○ (勝)

#### 3-2 チーム力得点の変容

チームビルディングを目的としたデイキャンプの事前、事後、リーグ7戦、FINAL1戦の計10回の測定を行った。(表2) まず、チーム全体でみたチーム力得点については、中盤でやや減少するものの概ね右肩上がりの曲線で理想的な変容を見せている。(図1) そこで、10回の調査時期を要因とした分散分析を行った結果、0.1%水準の有意差が認められた ( $F(9.333) = 10.1$   $p < .001$ )。有意差が認められた調査時期について多重比較を行った結果、直前と第7戦の女学院、FINALの関学において0.1%水準で有意差が認められ、直前と第2戦の立命、第6戦の神戸学院においては5%水準で有意差が認められた。そして、直後とFINALの関学戦において0.1%水準で、初戦の同志社とFINALの関学戦において1%水準で、2戦の立命とFINALの関学戦において5%水準でそれぞれ有意差が認められた。また、6戦の神戸学院とFINALの関学で1%水準、7戦の女学院とFINALの関学で5%水準の有意差が認められた ( $Mse = 201.5$ )。

表2 チーム力得点の平均及び標準偏差と分散分析結果

		調査時期										F値
		直前	直後	初戦 同志社	第2戦 立命	第3戦 大阪大谷	第4戦 関学	第5戦 武庫女	第6戦 神戸学院	第7戦 女学院	FINAL 関学	
チーム力得点 (SPTT)	M	247.5	253.8	258.6	262.2	265.9	265.4	265.1	262.5	264.6	274.2	10.1***
	SD	23.9	13.7	22.4	16.2	23.2	19.5	21.6	16.6	16.8	16.9	

\*\*\*p<.001

本学女子ラクロス部におけるチームマネジメントの分析

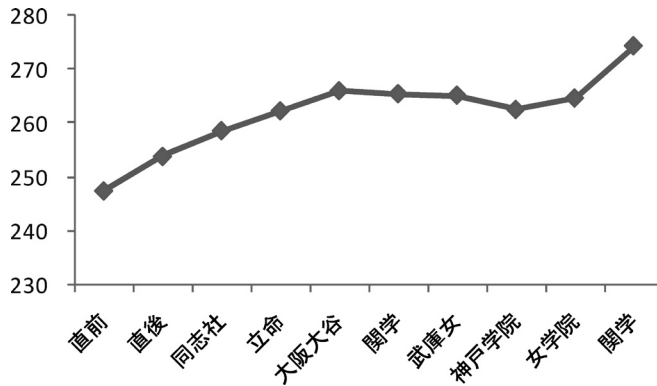


図1 チーム力得点の変容

3-3 チーム内のメンバー間とチーム力得点の変容

次に、チーム内のメンバー間とチーム力得点の変容を明らかにするため、前述の通り、主にベンチ入りした20名をA群、主にベンチ入りしていない18名をB群と分類した。そして、10回の調査時期と群間におけるチーム力得点の変容を二元配置の分散分析を行い、時期の主効果がみられたので多重比較を行った。(表3)

まず、チーム全体でのチーム力得点の変容と同様に、概ね右肩上がりでの理想的な変容を両群共に見せている。(図2) 分散分析の結果、交互作用に有意な差は認められず、各因

表3 群間でのチーム力得点の平均と標準偏差と分散分析結果

	直前		直後		初戦 同志社		第2戦 立命		第3戦 大阪大谷		第4戦 関学		第5戦 武庫女		第6戦 神戸学院		第7戦 女学院		FINAL 関学		群	時期	交互作用
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	F値	F値			
チーム力得点	253.1	19.6	252.8	10.6	261.9	22.1	264.8	12.1	266.9	23.2	267.4	22.8	269.1	23.1	262.1	19.4	266.7	16.3	274.6	19.3	0.84	10.2***	0.89
(SPTT)	241.2	27.1	255.0	16.7	254.9	22.7	259.3	19.8	264.8	23.8	263.1	15.3	260.7	19.4	262.9	13.2	262.2	17.4	273.8	14.3			

上段:A群(n=20) 下段:B群(n=18)

\*\*\*p<.001

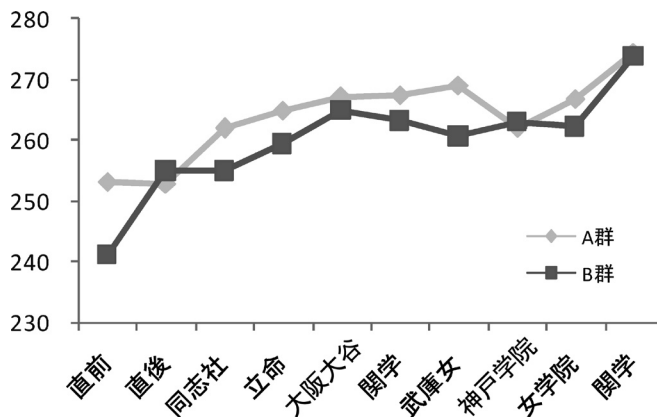


図2 群間でのチーム力得点の変容

子における群の効果と時期の効果について見ていった。その結果、群の効果に有意差は認められず、時期の主効果に0.1%水準の有意差が認められた ( $F(9,324) = 10.1$   $p < .001$ )。主効果が認められた時期に対して多重比較を行った結果、直前と第7戦の女学院に、FINALの関学に0.1%水準、直前と3戦の大阪大谷、4戦の関学、5戦の武庫女に1%水準、直前と2戦の立命に6戦の神戸学院に5%水準でそれぞれ有意差が認められた。また、直後とFINALの関学に0.1%水準、初戦の同志社とFINALの関学で1%水準、2戦の立命とFINALの関学で5%水準の有意差が認められた。(Mse = 202.2)。

#### 4. 考察

本研究では、ラクロス部のチーム力得点の変容と、チームを2群に分類し、それぞれの群でのチーム力得点の変容を明らかにした。そして、それらをもとにチームマネジメントに関する分析を行った。まず、チーム全体のチーム力得点の変容では、直前とFINALまで概ね順調な右肩上がりの曲線を描いている。ラクロス部は年度当初より「関西完全制覇」を目標に掲げチームマネジメントを行ってきた。そして、チームビルディングのキャンプでチーム力が向上し、強豪の同志社に勝利すると一気に波に乗れた感がある。中盤では唯一の敗戦もあり大きな変化を見せなかったが、最終戦の結果を問わずFINALの出場が決まり、続いてリーグ戦1位通過を決めたことなどから、FINALに向けて一気にチームがまとまっていったと考えられる。

次に、A・B群における変容を見てみると、以下のことが明らかになった。チームビルディングのデイキャンプではA群B群の差が逆転している。ここで考えられることは、主に試合に出ているA群はリーグ開幕前に大切な練習時間を削るよりも練習する方がいいと捉えてしまい、キャンプの重要性を理解することが出来なかった。しかし、直前よりも直後の得点が向上したB群は、リーグ戦を意識せずにキャンプをポジティブに捉え取り組むことができ、得点が向上したと考えられる。この考察から、チームビルディングを行う際は、意図や目的意識をチーム全体に浸透させる必要性がうかがえ、そうすることによりチーム全体としてより良い結果が得られるのではと期待がもてる。

次に初戦の同志社戦では、A群がB群の得点を上回った。同志社大学は一昨年、昨年と関西リーグの覇者であったが、春期リーグ戦では、その同志社に勝利しており、覇者への挑戦というプレッシャーはなかった。また、今期初戦で、かつ関西学生リーグ戦の開幕戦、集客試合、長居陸上競技場の大舞台という環境要因がA群のモチベーションをあげ、それが得点にも影響したと推察される。B群は、前日にメンバーが発表され、初戦の大舞台でメンバーに入れなかった事が得点の減少に影響したと推察される。

第2戦の立命では、両群ともに得点は向上している。立命戦は同志社戦から3週間も試合期間が空いており、初戦の反省をもとにチームを立て直すという点で時間が取れたことは幸いであった。同志社戦の試合結果に満足していないA群は、同志社戦で出来なかったことを、同志社よりも格下の立命戦で挽回し、今期の目標である、10点を取るという気持ちで取り組んだ。それに対して、B群もA群同様の向上を示した。その要因の一つとして、B群の多くが立命戦の一週間前に集中講義があり、それを理由に練習を休むのではなく、

自らで時間を作り、授業前に各自練習するなどして試合へのモチベーションを維持できたからだと考えられる。

第3戦の大阪大谷戦では、A群は同様に練習してきたが、あまり良い数値が出なかった。その半面、B群は集中講義も終わりチーム練習に参加でき、大人数で練習することができたことで、よりチームへの意識も高まり得点が向上したと推察できる。

次の第4戦は、春のリーグ覇者で、今期一番のライバル校でもある関学であった。この試合は集客試合で、スタンド付きのいつもより良い会場で、大勢の観客の前で関学に勝ちたいという気持ちがA群には多いに見られた。そして戦術面において、DFでは新しく考えた戦術で相手を困惑させて勝つという目標設定がA群の得点を高めたと考えられる。また、B群の得点が減少した理由は、集客試合なので試合に出たいがメンバーに入れないという悔しさが得点に影響したと推察される。

第5戦の武庫女では、A群B群の差が最も開いた試合であった。その武庫女戦は、今期リーグで唯一負けた試合となった。A群は前節で関学に勝利し、武庫女戦前の練習では、武庫女戦のイメージの中で練習していた。しかし、B群はA群が関学に勝利して、次の武庫女戦に対しての意識が希薄で、浮かれているようにうつり、それを「気が緩んでいる」と捉えてしまい、試合に出られないジレンマなどから得点が減少したと考えられる。

第6戦の神戸学院戦では、B群の得点がA群を上回った。神戸学院は今期初めて1部に昇格してきた大学であるが、A群は前節の武庫女戦に負けた悔しさが残り、それが数値として表れている。監督やコーチがいれば、そこは意識的に切り替えるようにさせるのだから、学生主体のチームであるからこそその弱みが顕著に表れた結果である。それに対してB群は、数名がメンバー入りすることが予想され、得点差が開けば、試合に出られるチャンスが多くなると言われており、試合に対する意欲が上がり、得点が向上したと考えられる。

リーグ最終戦の神戸女学院戦では、A群の得点は向上、B群は減少している。前節の結果により、女学院戦の試合の勝敗関係なくFINAL出場が決定しており、A群は自分たちがFINALの試合で思い描くラクロスをし、FINALに向けての勢い付けの試合として練習していたのが得点の向上につながったと考えられる。それに対してB群は、得点が減少している。その理由として、A群の意識が目前の女学院戦よりFINALに向いており、試合への意識と集中力に欠けると捉えていた。加えて、試合のメンバーもいつもの固定メンバーに戻った点も得点減少の要因と推察される。また、前節の神戸学院戦から二週間も空き、試合へのモチベーションが維持できなかったのではないかと推察される。

そして、今期の目標である関西完全制覇がかかった試合であるFINALでは、A群B群共に最高得点を示し、両群の差も最小であった。FINALの試合に向けては、今まで以上に細かいスカウティング、試合1週間前にメンバー発表、その1週間はFINALの試合に出場するメンバーだけがメインで練習するようにし、チーム一丸となりFINALに向けての準備をすることができた。このような準備のおかげで、A群は試合までの練習の中で、今まで以上に細かい戦術も話し合うことができ、より実践的なコミュニケーションを図ることができた。そして、B群はスカウティングで得た情報を基に相手である関学になりき

り、練習ではA群の相手役に徹した。B群はフィールドに立って関学を倒すことはできないが、関学になりきりFINALと言う試合を意識することで、試合に対しての意識もチームに対する意識も今まで以上に高まったことで、得点の向上に繋がったと考えられる。

今期リーグ戦で、キャプテンがチームマネジメントを振り返った際、最も重要視していた点は、「部員全員が自分自身の役割を考える」という点であった。このチームの一員として、チームのために自分に出来る役割は何なのかを部員に考えさせた。これはキャプテン、OF・DF各リーダーが決めるのではなく、部員一人一人が自ら考えることにより、「自分がいるからみんながラクロスができる」と言う考えを持たせたのである。そして、具体的に試合に出ている人は「点を決める」や「ゴールを守る」などがあげられるが、試合に出していない人も「応援でチームの雰囲気をよくする」や「選手の緊張をほぐす」など、いろいろな役割があることに気づかせ、自分自身で考え、行動に移すようチームマネジメントを実践した。そして「自分はこのチームに必要。だから、チームのために何かしよう」と言う考え方が生まれると、チーム力が高まり実力以上の力が発揮できると考えたのである。

## 5. 結論

本研究では、以下のことが明らかとなった。まず、統計結果からみた量的指標では、チーム全体としてチーム力得点は向上し、FINALでは最高得点を示した。そして、A群とB群のチーム力得点もチーム全体と同様にFINALで最高得点を示し、その群間においても差がないことが明らかになった。また、FINALでは、両群のチーム力得点は見事に接近しチーム全体としてひとつにまとまった。

次に、チームマネジメントの分析では、学生主体の組織（チーム）であるがゆえの強みと弱みが顕著に現れた。A群における敗戦後のメンタル面での切り替えやB群のモチベーションの維持など課題は浮き彫りとなった。しかし、絶対的な監督やコーチの存在がない分、キャプテンが中心となり部員全員に自らの役割を意識させたチームマネジメントは、見事に関西完全制覇という目標を実現させた。

学生主体の強みを最大限に生かしたチームマネジメントの成果とそれを手がけたキャプテンシーが今回の関西完全制覇への要因であり、すばらしい成功事例となった。

## 付記

- ・本研究は、蜂須賀美羽氏（平成20年度女子ラクロス部キャプテン）の卒業研究を一部加筆修正したものである。
- ・本研究の計画から実施、その後の分析まで、理論的・実践的なご助言をいただきました相奈良律氏、森本崇資氏に深く感謝しここに厚く御礼申し上げます。



## 本学女子ラクロス部におけるチームマネジメントの分析

### 参考・引用文献

- 1) 福富信也 (2006) 連載 チームビルディングー個を生かすための組織作りー、月刊トレーニングジャーナル28 (2)、pp50-54.
- 2) 吉井 四郎 (1969) バスケットボールの勝敗を決する要因 ボール・ゲームを分析する (特集)、体育の科学 19 (6)、pp354-358.
- 3) 土屋裕睦・北森義明・今村律子、チームビルディングー直接的アプローチの探求ー、日本スポーツ心理学会第29回大会ミニシンポジウム資料
- 4) 福原 理恵・南本 侑子「バレーボール競技におけるチーム・ワークと戦績の関係について」大阪国際大学平成16年度卒業研究
- 5) 木村 恵理「ラクロス競技におけるチームワークと戦績、ならびに心理的競技能力を戦績の関連性について」大阪国際大学平成18年度卒業研究
- 6) 矢野 幸「硬式テニスリーグにおける個人の心理的競技能力をチームワークに関する一考察」大阪国際大学平成19年度卒業研究
- 7) 河端 倫子「バレーボール競技における個人の心理的競技能力及びチームワークと戦績の関連性について」大阪国際大学平成19年度卒業研究

